
とある砂漠にて～その弐～

翠川剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある砂漠にて～その弐～

【Zコード】

Z7207B

【作者名】

翠川剣

【あらすじ】

俺は井戸掘る為に生まれた。だから俺は生涯、村の井戸を掘ることしかできない。それ以外は許されない存在。俺に自由は無い。ただ村のために井戸を掘り続けるだけの存在だ。

俺は井戸掘る為に生まれた。

だから俺は生涯、村の井戸を掘ることしかできない。
それ以外は許されない存在。

俺に自由は無い。

ただ村人のために井戸を掘り続けるだけの存在だ。

そんなある日、俺の村に悪魔崇拝者か魔法使いにしか見えない男
がやって来た。

男は黒のとんがり帽子に、金の蛇の紋章が背中に描かれた黒いロ
ーブを身に着けていた。

「君は自由が欲しいのだろう？だったら井戸掘りなんて止めてしまえ
ばいいのだよ」

俺は男の言っている意味が良く理解できなかつた。

何故なら、俺は井戸掘り以外のことを考えたことがなかつたから
だ。

たぶん俺だけだったら、この考えは一生思いつかなかつただろう。

「君に自由といつもの教えてあげよう」

男はそう言つと俺の一部を破壊すると、村を出て麦わら色の砂漠に消えて行った。

黒いロープを着た男が去った後、俺は井戸掘りをすることができなくなった。

最初は、とても悲しかった。けれど、だんだんと嬉しくなついた。

俺は彼から自由をもらつたことに感謝した。

俺のいるこの村は、滅多に雨が降らない。

しかし、幸運な事にこの村は地下水が豊富なので、井戸を掘れば水に困ることはない。

だから俺が井戸掘りができなくなつたせいで、村は水不足になつちまつたようだ。

それで、たくさんの村人が喉の渴きに苦しいでいるみたいだ。俺の聞いた話では、もう何人も死んでしまつてているらしい。

全くかわいそうな話だ。

裕福な生活を送つてゐる奴らがこの話を聞いたり、
哀れな村人達の境遇に思わず涙してしまつだらうが、

俺は村人の連中に同情する気はねえ。

酷い奴だつて？

酷いのは連中のほうだ。

あんたには親はいるかい？
もちろんいるよな。

じゃあよ、名前はあるかい？
これも普通あるよな。

もし誰も名前を呼んでくれないとしたらあんたどうする？
そりや怒るよな？

連中は俺のことを、あれだのこれなんて言つんだぜ？

なあ、酷い連中だろ？ 血も涙もない連中だろ？
これは連中の嫌がらせとしか言つてはいけないだろ？

悪いのは連中で、俺は悪くねえ。

だからよ。俺は連中に同情したりしないぜ。

さて、今日はとても暑い。

おやうべ今年一番の熱だつ。

今日中に村の僅かな水の貯えは無くなるだつ。

そうしたら農業も出来なくなつて、連中の作物は枯れて食糧不足になるはずだ。

餓死者も相当出るはずだ。
全くいい気味だぜ。

このまま連中がみんな死んでくれれば俺は嬉しいぜ。

いや、待てよ。

連中のことだから、

きっと僕に井戸を掘つてくれるよつたに頼み込んでくるはずだ。

豪華な食べ物や美少女を俺に寄越しては嘘くさい祈祷師が、
井戸掘りを頼み込むに違いない。

そんなことをしても俺は、もう井戸掘りできないんだけどな。

俺が井戸掘りを止めて三ヶ月くらい経つただろうか。

綺麗な夜、胡散臭い祈祷師と村の男達が、

十代半ばの少女を連れて俺のところにやつてきやがった。

祈祷師は意味不明な呪文を唱えると、村の男達も同じような呪文
を唱えて、

少女を俺の前に差し出してきやがった。

長い黒髪に褐色の肌の少女だった。

祈祷師は呪文を唱え終えると、村の男達が鈍色のナイフを祈祷師に渡す。

祈祷師は刃の鋭いナイフを天にかざすと少女の後ろに立ち、少女の柔らかい肉を斬る。

ナイフを斬りつけた少女の皮膚から赤い血しぶきが飛び、さすがの俺もその光景には吃驚した。

祈祷師は、少女を鋭いナイフで切り裂いては呪文を呴く。

女達は悲しみの涙を流す。

男達は苦しみの汗を流す。

やがて、少女は血を流しそぎて死んだ。

生贊として死んだ。

少女の可愛い顔は、苦痛で満ちていた。

この少女にも名前があったんだね。

でも、少女は名前を呼ばれること無く死んだ。

じつや、あの世でもこの子は救われないな。

なんとなくそんな気がした。

ある日、俺の村に旅人が一人やってきた。

頭から白いローブを被つた、碧色の目を持つた珍しい旅人だ。

この村に旅人が来ることは滅多に無かつたので、連中は大騒ぎだ。

とある村人が、村の男達で緊急会議があつたらしいぞと言つている。

とある村人が、会議の結果、旅人は村長の家に泊まることになつたらしいわと言つている。

俺は嫌な予感がした。

次の朝、旅人は俺のところにやつて來た。

両手には機械の工具、

黒革のホルスターに回転式拳銃リボルバーが吊り下げられていた。

その少し後ろには、連中がおどおどしながら事の成り行きを見ていた。

その数、三十数名。

村人は俺が井戸掘りが出来なくなつてから、かなりの人数が死んでしまつたようだ。

旅人は、俺の頑丈な鋼鉄の体を簡単に登つていく。

旅人は俺の思考回路が納まつてある中央部まで来ると、持つてきた工具を使ってメインハッチを開きやがつた。

旅人は連中に向つて、

「やつぱりこの機械の回線がショートしていますね。これではこの機械は起動しないですよ……。でも、皆さん安心してください。配線さえ直せばまだ使用できます」

旅人は慣れた手つきで俺の回路を直していく。
白いロープを着た男がショートさせてくれた作業用の回路を直していく。

これが直つたら、俺はまた井戸を掘り続けなればいけない。
俺の自由が終つてしまつ。

作業回路が直ると、

俺の作業用のドリルは俺の意思とは関係なく稼動した。

グオン、グオオン、グオン、グオオン、グオン、グオオン

けたたましい金属音があたりに響く。

村人から歓声が上がる。再び俺は井戸掘りを始める。

俺の自由は奪われた。

「型式番号X-1-4287、クロセルか」

旅人は、井戸掘り用ロボットのボディーに刻み込まれた名前を呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7207b/>

とある砂漠にて～その弐～

2010年12月30日02時07分発行